



ちりとしてちん

試し読み

## おっしちぎる

厚い雲がぼちぼちと空を重たく覆っている。

庭にある山茶花がその花の重さを耐えきれぬといったようにぼたりと落とした。今年は晴れた日が多かったせいで寒くとも花は多く咲いた。白く、白く、濃い色の葉を覆うように花は咲いて、訪れる人の目を楽しませたから落ちた花すら拾って水盤に浮かべたりしていた。

花の名前すら前は知らなかったし、ただあるものとして見ていたので咲いた後にさみしく散って暗い色に変えてしまうことも、種をひっそりつけることもなにも知らなかった。

「小糸？」

仙一郎はふと顔を上げて庭を見る。文机の前に正座をして本を読んでいた。

———なにかの心配がしたように思ったのだけど。

盛んに火を焚かれた火鉢のその上で鉄瓶がせつせと湯気を上げている。空気が熱されてその様子が見えるようだ。

「……」違うらしい。

仙一郎は再び視線を落として文字を追い始める。本は兄の亮太郎から借りたものだった、兄は父の前の妻との子で、母親の違う兄弟だった。仙一郎が物心つく前に養子に行ってしまったので一緒に住んではいないが、それでも仙一郎に何かあったと聞きつけると来てくれる、熱が引いた後に護符を握りしめて大あわてでやって来たりしてどじなところもあるけれど、そんなところも含めてやさしい兄だ。しかも父親譲りの品のある容姿も役者裸足の顔貌も、いっただって人目を引くほどで、それなのに全くと言っていいほど頓着していないのでこちらがヒヤヒヤしてしまう。

これまで家に来てくれたことはなかったが、二年前に寝込んだときに

つきつきりで看病してくれた。家の複雑なことは分からないが、もう何年も会ってなかったのに、勇気を出して送った文ひとつでやって来て、昼夜問わずつと傍にいて、汗を拭い、薬湯を与えてくれた。母親はいい顔をしなかった、覚えていて、尖った怖い目をしていたから兄にもつらかったに違いない、それでも病がちな自分を助け、ときには叱ってくれる。この兄は父親の記憶が殆どない仙一郎にとっては父も同じで、お陰で今の自分が居るのだとすら思っている。

父親のことも、兄と一緒に住めない事情も、自分にはわからない。番頭は知っているのだろうけど教えてはくれない。母親とまたその親戚たちと折り合いが悪いのだ、とそれだけが分かっている。

悪いから、なのかな。

不仲をとりなすべき父親もいない、なんとかかしたいと思うけれど、どうしてなのか、どうにかしたいと、遠慮がちに問うても寂しい顔を見がするから、それ以上は何も言えなかった。兄の寂しげな顔ほどこたえるものはない、この世の憂いをすべて背負い、嘆けずにつくねんと哀しみの淵にいるようで、仙一郎には踏み込むことが出来なくて引き下がってしまうのだった。

「どちらかというと、叔母様かな……」

ふうと息を漏らす。親よりもなんの血の縁だか知れない親戚の方がやたらに口を挟むような気が、このごろはする。

「わからないことばかりだよ」

目隠しをされている。

二年前の熱を境に自分はかなり元気になれたような気がするのだけれども、世の中のことを自分は見ていなさすぎるのだと思う。知らないことは多く、本を読む程度ではとても追いつかない。

「……あ」ぼたりと、白いものがまた落ちた。この山茶花は八重で、それがもろとはがれ落ちるさまはなんともせつなくみえるものだ、と兄の義兄になった男が言っていた。

そうでもないよ。仙一郎は気持ちの中で反抗的に呟く。

「ん？」

前の通りを小糸が走っていくのが見えた。首を伸ばして向こうを見る。庭があつて突き当たりは板塀だが、足のところは見えるようになっているのである。

真っ白い足袋にお気に入りの履き物、さんざん自慢されたので覚えていた。真っ赤な鼻緒が黒塗りに映えるのでそれだけで目立つのだ。

「……」

小糸は兄に釣られて出入りするようになった向かいの家の娘だった。とはいえ、下町育ちの蓮葉な娘でずけずけと物を言うのがいちいち痛に障って、仙一郎の数少ない話し相手というのに喧嘩ばかりしていた。小糸の家は表通りに面した大店であるが、一人娘なのに小糸は乳母日傘のお嬢様ではない。家は和泉屋という屋号で本店は大坂の廻船問屋、出店をいくつも持つ身代だった。江戸店のこちらは上方から取り寄せた乾物などを売っている。娘なんていうから大人しいだろうと思っていたが、このおなごはうるさいとおうか、まあ賑やかで、出かけるときはたいてい回ってこちら離れの横の細い抜け道をばたばたと通ってゆく。猫や子どもならまだしも通るなど言うのに聞く耳はまったくなく、ここに気配があるとすれば小糸といつてよかった。

普段は冬でも裸足なのに、今日はこぎれいになっている。足は。

「なんだ」そういうこと。

色気が出たもんだ。

小糸には好んでいる人が、いるらしい。

算木は、二寸ほどの木の短冊である。

「えと……」

二日降り続いた雨が止んで今日は暖かいので火鉢は湯を温めておく程度でしか火を入れてない。庭から明るい日差しが入って、水をたっぷりと含んで庭木もいきいきとしているように見えた。光は朱色と黒に塗り分けた算木や畳に広げた算盤を白く照らして眩しいくらいだった。

「これが、ここで……」九九を呟きながら仙一郎は算盤の枡目に算木を置

く。そして傍らに置いた本をめくって載っている図と確かめる。

「あれえ？」

描かれている絵図と自分が考え考え置いた位置は違っている。

「先生のようにはいかないなあ……」溜息とともに呟く。

仙一郎は、幼い頃から身体が弱く、手習い塾などに通うことが出来なかった。季節が変われば喉をやられ熱を出す、駆ければのどがひゅひゅ鳴って白湯をのみのみ一晩掛けてようよう並の呼吸を戻すという有様で、これではと離れに室を与えられ、外出も許されなかった。不憫に思った隣の隠居が口をきいてくれて私塾の師匠が教えに来てくれることになって二年、九九やら字は番頭が教えてくれたけれど師匠は算法指南を主としており、論語よりも上方の百川流だのこちらの関流だのの授業はもっぱら算術になっていた。

江戸でもどこでも時代に流行廃りはある、剣はどこそこ流、芝居は誰それ、医術はここだろう、という具合で、算術もひとつの流派が広がっていたが鷹揚な師匠、飯田多聞はこだわりなく、おもしろい問題、やり方であると聞けば何でも持ってきた。仙一郎はさして十露盤が得手ではないから毎度必死である。

「んー。最初から」

枡に並べた算木を悔しく集めながらも一度本を手取る。問題を読み直すのだ。解き方は問題にある、分からなくなったら戻ること、何度も教えられたことだ。

——からん。

陽光の差す縁側に影が現れた。

「またそんなのやってる」

からかいを含んだような声が落ちてくる。

「うるさいな、何しに来たのさ」

「あら、ご挨拶」

算盤を見たまま憎まれ口だけで返すと、相手は気にする風でもなく応えていいとも言わないのに上がり込んで火鉢のわきに腰を下ろした。

「誰かに見られたらどうするのさ、外聞悪い」

## 静日録（奉公顛末記）

（前略）きよ女は、奉公にあがり、読み書きが出来るようになってすぐに、日記をつけ始めたそうだ。その名も静日録。当時の師匠の言いつけを守り、手習いの練習のつもりで、書き続けてきたのだという。（中略）古くから書き溜めていた帳面は、茶色く黄ばんで、綴じも崩れかかっている。最初の帳面は、反故紙を自分で纏めたものだったそうだ。随分と溜まった後から『静日録』としたそうだが、その名の通り平靜な日々を書けるようになったのはずっと後のことで、付けた当時は「静かな日々が過ごせませよように」と言う祈りを込めてつけたのだそうだ。（後略）

『江戸庶民の生活研究（第五號） 静日録考』より

江戸は日本橋伊勢町にある、乾物を商う大店「波多屋」で、三十年以上奥向きの女中を勤めるきよは、店中の者から、百戦錬磨の古強者と言われている。

きよに掛かれば、隙あらば何か悪戯をしようと思んでいる主の息子や、幾つになっても、好き嫌いが多くて、我が儘放題、気に入らなければひどい癩癩を起し、母でさえ躰の匙を投げた娘、押しかけて来ては、僅かな門付けを乞う者達や、何かと言っていると固まってくすくす笑ってばかりの噂好きな下働きの娘達、自我が芽生えて来たのか、いちいち理屈を捏ねて見せる丁稚など、簡単に言う事を聞かせることが出来る。

きよの前に出ると、まるで蛇に睨まれた蛙のように、皆大人しくなってしまうのだ。

この波多屋が、（大概がこの店で働く者達にとって）たいした騒動もなく、平穩無事に日々を過ごせるよう、奥向きを切り回しているのは、きよだと言っても過言ではなかった。

とは言え、本人が威張り散らしているかと言えば、そう言う訳ではない。

手代、番頭に次ぐ先代からの古参だから、主人夫婦でさえ頭が上がらない、と言うのでもない。

至って大人しく、余計な事を喋らないのが、返って逆らってはいけなような、妙な迫力を醸している、と言ったところだ。

きよからすれば、何度も居成（いなり）年季の期限が来ても、他の店へ移らずに同じ店でまた働く事をさせて貰って、波多屋で色々な出来事を見て来た結果、ちよつとやそつとの事では動じなくなってしまうのだ。事実、先代の波多屋では、色々な事が、他のお店より多く起こり過ぎた。

そして、今でこそ汗一つかかずに、どんな物事も冷静に捌く事が出来るきよも、最初の頃はそうでもなかったのだ。

○●●○

「きよ！おきよ！」

師走も押し迫ったある日、隣三軒に響き渡るような癩癩を起した土間声が、庭で洗い物をしていたきよを襲った。

声の主は、乾物を扱う「波多屋」の女房、たかである。既に相当な癩癩を起している声だ。後できつと差し込みとか癩を起すに違いない。

「あい、只今」

きよは、すぐさま返事を—と言うか、負けない位の怒鳴り声を—返すと、洗い物を放り出し、前掛けで手を拭いながら声の主を探した。

大方、主人達が寝起きするの座敷の縁側辺りであろう。

このお店に女中奉公に来て二月、何を置いてもこれだけは覚えた。

一度等は、たかが何処にいるのか判らず、大して大きくもない奥向きを、互いに走り回って、たかと顔を付き合わせるまでに、四半刻余りも掛かった事があった。

その時のたかの怒り様と言ったら凄まじく、長い長い時間を掛けてたつぷりと怒鳴られ、奉公に上がったばかりなのに危うく暇を出される所だっ

た。そんな事態に驚いた女中頭に手代や、家族達が総出で宥めすかしてもたかの怒りは収まらず、揚句に癩を起こしたたかの介抱に忙しくなった所で、やっときよは解放されたのだ。

後で聞いた所に拠ると、たかは相当な癩癩持ちで、きっかけすらもなくいきなり気まぐれに機嫌が悪くなったり、ああした癩癩を起こすのだそう。そうなたら、癩を起こすなり、差し込みを起こすなりして、たかが自分の身を構う事しか考えられなくなるまで、収まることはない。

間の悪い事に、たかの機嫌の悪い所に加えて、たかの癩癩が爆発するまでに長い時間が掛かってしまった事で、きよに対する癩癩がより激しくなってしまうのだ。

運が悪かったとしか、言いようがなかった。

きよにとってその日の出来事は、今思い返してもそそけ立つ程恐ろしかった。

それからは、先輩女中達の経験に従い、まずは主人達の座敷に向かうようになった。後は、回数を重ね波多屋に慣れる内に、きよが居る場所と、たかの声が聞こえた方角で、おおよその見当が付くようになったのだ。

それが出来るようになるまでは、正直生きた心地がしなかったものだ。

真冬の水仕事は、直ぐに手を赤くする。濡れたままではかじかんでしまうし、あかぎれにもなる。

だが、きよにはあかぎれよりも、たかの恐ろしい癩癩に会う事の方が、余程嫌だった。しつかりと手を拭く、などという瑣末な事には関わってられない。濡れたまま小走りをするだけで、どんどん手から温もりが奪われていったが、きよは構わなかった。

きよは信濃の小さな農村に生まれた。小さな畑で細々と作物を育てる両親は、子沢山だった。上に居る四人の姉妹は、全員奉公に出ている。きよの下にも四人の弟妹がおり、きよが聞き分けが出来るようになると、直ぐに弟妹達の面倒を見ながら、家の仕事をさせられた。

十の歳を迎える冬、つまり二月前には、江戸に居る大叔父を頼って江戸に出て来た。そして口入れ屋を紹介してもらい、波多屋に奉公にあがったのだ。

悪い見方をすれば、それは口減らしであつたが、きよは小さな内から、自分もいずれば家を出て、姉妹達のように奉公に出なければならぬと悟っていたので、別に両親を恨んだりもしなかった。

寂しくないと言えば嘘になるが、一方で家を出られたことに喜んでもないのだ。そのまま家に居るより、お仕着せとは言え格段に綺麗な着物に、温かい食事、ふかふかの布団まであるのだ。寝起きする板間も隙間風は少ないし、大体起きている間は家の中を動き回っているのだから、多少の隙間風なぞ気にもならない程度だった。

波多屋に来るまでは、雨風が吹き込むあばらやで、まともに飯も食えなかったのだ。それに比べれば、ここは極楽だと思つた。

流石に凍えてきた大量のアカギレをこさえた手を、荒っぽく前掛けで拭いながら、今日は一体何だろうかと、きよは考えた。

「奥様、お呼びでしょうか」

予想通り、座敷の縁側にいるたかに、きよは恐る恐る声を掛けた。たかは仁王立ちをして、庭木の躑躅を睨み付けている。きよが来た事にも気がつかないのか、何かに気を取られているのか。

たかは、暫く口を聞かなかつた。

きよが、何か仕出かしただろうかと不安になった頃、漸くたかが庭師を呼べ、と静かな声で言つた。どうやら内に相当な癩癩を押さえ込んでいたのだが、きよに向かつてぶつけるつもりではないらしい。何事も無かつた事にほっとしながら、きよが下がろうとすると、たかが呼び止めた。何かを言おうと口を開いたが、たかは思い直したようだった。

「何でもありません。お下がり」

たかはそう言うと、さつさと座敷に入ってしまった。

## \* お願いとおことわり \*

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: [nedocoya@gmail.com](mailto:nedocoya@gmail.com)

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)